

おつかれさま 新たに教職員になったみなさんへ

「自分は大切にされている」

実感が成長の要

彩の国子ども・若者支援ネットワーク、元高校教員 白鳥 勲

温もりある眼差しで見守る

1969年から41年間は高校の理科教員として勤め、退職後の8年間は校門の外で貧困世帯の小・中・高校生への学習支援事業（家庭訪問と無料の学習教室）のスタッフとして活動してきました。高校教員時代の30年近くは「さまざまな困難を抱える生徒が多い」―いわゆる「困難校」で勤務し、その後も貧困ゆえにさまざまなストレスを抱える保護者、子どもたちと現場で接してきました。

校門の内外で、数え切れないほどの生徒に接してきましたが、それらの生徒たちと

の関わりで学んだことは成長期の子どもたちにとってなにより大切なことは自分を温もりある眼差しで見まもり、心配し、支えてくれる大人たちの存在です。子どもたち自身が「自分は身近な大人から大切に接してもらっている」ことを実感する機会をできるだけ多く持つことです。

子どもたちが、大人からの温もりを感じるときとはどんな時か。廊下ですれ違ったとき、目が合った瞬間ニヤツとして「元気か」となげなく声をかけてくれる、自分の思い、悩み、意見をきちんと聞いてくれる時間を日常的にもつてくれる、H R、部活で何かを取り組むとき自分たちで話し合

い、相談するように心配りをしてくれる。時には本気で叱ってくれる、学習内容がわからなくて、授業についていけなくなったときに個別指導をしてくれる、困った時に解決のために動いてくれるなど―自分たちを一人の人間、個人として尊重し、敬意をもつて接してくれる時です。

最近、特に思うことは長い目で見れば「敬意をもつて接すれば敬意で返ってくる」「温もりある働きかけはいつか温もりある反応で返ってくる、そして子どもたちの成長の地下水脈として蓄積される」ということです。

「霧が晴れた」「世界がひろがる」

文科省が毎年実施している全国学力テストで明らかになったことは低学力と家庭・保護者の経済力、文化的環境が密接に関わっているということです。保護者が貧困世帯で経済的精神的余裕がない世帯の子どものテスト成績の平均点はそうでない世帯より低い結果になっています。そのことが示すのは子どもたちの潜在的能力が発揮できる

かどうかは育つ環境要因が大きいということです。テスト成績が低い子どもを「もともと能力がない」「意欲がない」と決めつけてはならないということです。

これまで多くの低学力といわれる子どもたちを教えてきました。数学でいえば15歳になっても小学校3〜4年の「壁」を越えられない子どもたちです。分数の意味、分数の計算などがわからない子どもたち相手に授業だけでなく少人数・個別指導をよくやります。教員と教え子の共同作業で「わからないことを見つけ、わかるために壁をよじのぼるように教え考える」という「学び」の原点での勉強を心掛けてきました。

問題がやっと解けたとき、あるいは問題の意味がつかめた時、彼らは「霧が晴れた、前の自分とちよつとちがう自分になった気分、世界が広がった感じがする」（いろいろな表現で）ということがあります。自分が今、すごしている世界とやや違う世界に踏み込めた自分を「勉強」の中で発見した子どもは共同作業をとみにしてくれた先生がいる、友人がいる学校で学び続ける意欲をもつのではないかと思います。

このような形で子どもたちがもつ潜在的な力、意欲を引き出してこそ「学力」―「学ぶに向かう力」、学習意欲が生まれるので

はないでしょうか。学習とはわからないことを見つけ、それを克服しながら新しい世界を拓く、視野を広げる営みであることを子どもたちに実感させたいいつも願っていました。

遠慮なくSOS、助けを求める

子どもたちは多くの大人との関わりあいの中で生活しています。さまざまな個性を持つ大人たちと接する中で子どもたちは「揉まれながら」多様性を学び、自分なりの生き方を選択していきます。一人の子どもにどれほど深く関わろうとも、他の教職員との「協同作業」の一部を担っているという意識を常に持ち続けることが大切です。私自身、いろいろな失敗を重ねて学んだことは、教員を続けるために必要な「修行」のひとつは困ったとき、迷った時（いつも迷っています）同僚に素直にSOSを出せるかどうかということです。遠慮なく助けを求められるからです。

教職員はそれぞれ個性をもった人間であり、得手不得手があります。同じくさまざまな個性をもった子どもたちの潜在能力を教職員全体で引き出すために、それぞれの役割を分担しながら、子どもを中心にした協同実践の場が学校です。

心の重心を子どもにおく

子どもの時々々の言動には必然性、背景があり、そこに思いを寄せることは、特に教職員に求められる心構えです。さまざまな言動の背景には、家庭での問題、学校生活でのストレス、子ども自身の発達課題、個性など複雑な要因が潜んでいます。さらに、成長期の子どものはさまざまな失敗、「間違え」をくりかえしながら少しずつ変わっていく、「脱皮」していきます。

私たちの仕事はその過程に寄り添い、見守る営みであり、時には不十分さ、「中途半端」さを受け入れる―「いつも問題があるのが当たり前」という心構えが大切です。心の重心をいつも子どもたちにおき、同僚、保護者、地域の方々との協力、連携をすすめることが今、求められています。



絵・大森宗次

子どもたちと出会い

「教師としての魅力」を見つけられる

狭山市立水富小学校教諭 細田 公康

私は6年前の4月、埼玉県小学校教諭となりました。それまでは、商社という違う職業に勤めていて、30歳になってから選んだ教師という仕事に、心の葛藤がありました。「俺は大丈夫なのだろうか」

「他は新卒の人ばかり…」

そんなことを心の中に思っていました。ですが、今では教員としてのやりがいや魅力の日々実感しています。教師という仕事の一番の魅力は、子どもたちから元気を分けてもらえること、彼らが変わっていく様子を間近で見られることだと考えています。

忙しかったり、気持ち落ち込んだりしていても、休み時間や授業を通じて子どもたちに接することで、新たな気持ちをもてるようになることも多くあります。

また、「こういう子どもに育ってほしい」

という自分の思いを子どもたちにつけていくことで、子どもたちは少しずつ変わっていきます。できなかった問題を解けるようになったり、苦手なことにも取り組もうとするようになったり。毎日ではなく、たとえ数日に一回だとしても、そのような場面に出会えることは本当に幸せなことだと感じています。

ある日のこと、漢字が苦手な子がいました。ミニテストで、他の子は平均90点以上なのに、その子だけは30点。時には、10点の時もありました。教え方をいくら変えても上手くいかない。そんな時に、ついこんな事を言ってしまいました。

「ちゃんと覚えようとしているの。努力が足りないよ」

うまくいかないイライラから出てしまった言葉でした。その時の、子どもの悲しい

顔が今でも忘れられません。休み時間の時でした。その子が自由帳に一生懸命に何かを書いていました。その自由帳を覗くと、漢字の練習をしていたのです。

私は「しまった！」と思いました。すぐに、何度も涙を流して謝りました。その日から、子どもたちのせいにしない教師になること、そして、どんなことがあっても出来ない子を見捨てないことを心に決意しました。

教職のすばらしさは、教員になってみて分かることがたくさんあります。教員になって、まだまだ経験が浅い私自身が、新たな「教員の魅力」を探している段階にあると思っています。時にはうまくいかず、保護者から厳しいことを言われることもあります。私も何度か、悔しさから誰もいない教室で涙したことがあります。ですが、経験を重ねるほど、そして、より多くの子どもたちと出会うほど、そして、より多くの子どもたちと出会うほど新たな「教員の魅力」を見つけられる。それが教員という職業なのではないでしょうか。私は異業種から転職して、教師になったからこそ、より強く教師としても魅力を感じています。今では心の葛藤はありません。胸をはって「小学校教師の細田です」と言っています。

1人で悩まないで！

中学校教諭 池田 綾花

私は教員3年目になった者です。今年は初めて1年生の担任をしています。それまで担任していた学年よりも言動が幼くて、体も小さくて、人懐っこくて。この子たちが3年後どんな成長をするのかワクワクしながら毎日生活しています。そして、その成長のために何ができるかを考え、直接子どもたちに関われることにとても幸せを感じています。

しかし、今こうして教師としてなんとか3年目を迎えることができたのは、周りの先生方のおかげだと本当に思っています。私は1年目から担任を持たせていただいたのですが、もちろんわからないことばかりで、失敗ばかりの日々でした。特に1年目の1学期は、かなりの頻度で校長室に呼ばれて怒鳴られるような生活でした。「やめたい」と思うことはあるかもしれないとは

覚悟していたけど、子どもたちに迷惑をかけるから「やめなきゃ…。やめるべきなんだ…」と考えるとは思っていませんでした。

そんな時に私を救ってくれたのは、周りの先生でした。怒られた後には必ず私を氣遣って話を聞いてくれました。クラスでなにか困ったことがあった場合には、一緒に考えてくれました。

私の場合、たまたま幸運にもそのような先生がいただけかもしれませんが、しかし、私の話を聞いてくれたのは、学校の先生だけではありません。誘っていたで行った学習サークルの先生など他校の先生もそうです。なので、まず私が新任の先生にお伝えしたいことは、一人で悩まないで、他の先生に悩みを吐き出してほしいということです。

相談にのってもらっている中で、気付か

されたことがあります。それは、私の言動に対して保護者から連絡が来てしまい、そのことを相談した時のことです。その先生は次のように言ってくれました。

「その子のため…と思って指導したことで怒られたり。何のために教師になったのか。教師って何なんだろう…。やってられないわ。」と思ったこと私もあるよ。でも、次の日教室に入ったら、子どもたちが笑顔で話しかけてきてくれた。その時に、私はこの子たちのために頑張らなきゃな。このクラスのために頑張りたい。って思った。きつと先生（私）のことを信頼して、先生が必要な子どもたちもたくさんいる。だから、報われないなって思うこともたくさんあるけど、クラスの子たちのことを考えて、その子たちの為になってあげて。」

今でも辛いことばかりです。早く帰った方がいいのは分かっているけど帰れない日ばかりです。でも、子どもたちのために頑張れる仕事って素敵だと思っています。一緒に頑張りたい！



健康な体

「休み」をとって

杉戸農業高校 赤沼 理恵

長い教師生活、うれしいこと、悔しいこと、びっくりすることがたくさんあります。それらを生徒と一緒に働く仲間と味わえることはとても楽しいことですし、やりがいを感じる瞬間でもあります。しかし、いつでもどこでも大切なのは健康な体と心です。

というのも私は今年、教師生活で初めて病休を取得しました。手術と約一週間の入院、さらに一週間の自宅療養の期間です。それまでの私は病休とは無縁でした。この頃からはサッカーをしていて、現在は女子サッカー部の顧問です。趣味はフットサルで平日でも仕事が終わってから「個サル」に参加します。組合活動では2016年に沖縄で行われた全教の「ゆいまる」に3泊4日で参加。埼玉高教のSAITANE!にも毎年泊まりで参加しています。そんな健康優良の私に病気が見つかった

のは昨年の9月でした。それからは以前と同じように前向きに仕事ができなくなってしまうました。まず、仕事をしながらの通院が一苦労でした。入院中は何かと家族を頼ることになるので、職場からは遠方ですが実家に近い病院に通院しました。しかし長い通院距離と山積みの仕事を天秤にかけて、仕事を優先してしまいそうになることがありました。

さらにふと病気のことを思い出し、気分が落ち込みました。自分では以前と同じようにふるまっていたつもりでしたが、生徒に「元氣ないね。」と言われたこともありました（こどもってこの辺に本当に敏感!）。薬の副作用で体がだるく、運動が楽しくなくなっていました。これもありませんが、仕事に集中しきれていない、楽しくないなと感じました。

現在は仕事に復帰し、徐々に運動も始めています。今だから言えることですが、よくある病気の簡単な手術で、それほど不安を感じなくてもよかったかなと思います。でも病気が原因で体だけでなく、心も不調に陥ったのは間違いありません。

始めに「長い教師生活」と書きましたが、私は今年採用7年目です。教師生活、全然長くないです。でも今回のことで病気は年齢、性別関係なく、いままでも健康だった人もあつと言う間に心も体も弱ってしまうと感じました。思い返してみれば、体の不調は病気が見つかる以前からありました。でも「忙しいから」「動けるから大丈夫」「他にも大変な人はいる」と思い放置していました。もし、もっと早く治療していれば、半分からい入院期間で済んだかもしれません。そう考えると、普段からもう少し自分の健康を真剣に考えるべきでした。

新任者の皆さん。やりがいを感じるためにも適度な仕事量でしっかり休みましょう。もし、キャパオーバーしている時は「これ以上は無理。休ませてください。」と訴えましょう。以前の私は「忙しい」とは言っていました。が、「休みたい」とは言っていないませんでした。それでも無理なら組合に相談!必ず力になってくれますよ。これからの長い教師生活をお互いにやりがいを感じられるものにしましょう。

仕事を楽しめていますか？

川島ひばりが丘特別支援学校 若山 健太

みなさん、仕事は楽しいですか？もしかすると、日曜日の夜に「サザエさん症候群」

になったりしていませんか？多忙化が進んでいる今、部活や学校行事で、休日もないという方も多いかもしれません。職員室では、「パソコンがお友達」になつていたり、教材研究をする時間もなく、思うような実践ができなかつたり等々。確かに「つらいなあ」と感じることも多々あります。そんな中ではありますが、私は「やつぱり先生って楽しいなあ、先生になつて良かったなあ。」と思います。なぜ、そう思い続けることができるのか。それは、私に「3つの存在」があるからだと思います。

1つ目は、なんとといっても「子どもたち」の存在です。一緒に勉強をしたり、遊んだり。「こんなに楽しい時間はないなあ」と感じています。また、その中で、子どもた

ちの成長にかかわることができ、先生つて本当にいいなあと思います。

2つ目は、「学びの場」の存在です。「楽しい」とはいつても、指導をする中で「どうすればいいのだろう。」と悩むことは山のようにあります。一人で悩んでいると暗礁に乗り上げることも。私は、組合や全障研の学習会やサークルに参加することで、「こうやってかわつてみようかな。」と、悩んでいたことに光が差してきて、月曜日が楽しみになります。私は、一人で悩まずに、学習会へ積極的に参加していくことをお勧めします！何かの研究サークルに通年参加するのでもいいと思います。

3つ目は、「学びの場」とつながつてくるのですが、「周囲の人」の存在です。グループの先生方とは、子どもたちの話で盛り上がりません。組合員も多い学校なので、学部

を越えて、学校のことを話すこともあります。学校外でも、青年部で野球観戦や飲み会をしたり、「地域交流会」で地域の方と話したりすることもあります。組合や研究サークルでも、親身になって話を聞いてくれる方がたくさんいます。大学時代の仲間と年に数回集まって、遊びに行ったり、飲んだりするのもいい気分転換になります。この「人のつながり」が、私の大きな支えとなっています。話せる人がたくさんいるというのは、本当に大切です。

色々と書きましたが、一番大切なことは、「一人ではない」ということです。必ず、頼ることのできる「人」や「場」があります。ただそれは、学校内ではないこともあります。ぜひ、学校の外にも目を向けてみてください。そして、今の学校の問題は、個人やその学校だけでは解決できないこともたくさんあります。「子どもたちが笑顔になる学校」をともにつくっていきましょう！



仲間の力・生徒の力・

読書の力

埼玉県立松山高校司書 小川 智子

私が県立高校に司書として採用されたのは1980年、新設校ラッシュの頃でした。着任した伝統校では、びっくりするようなことがたくさんありました。

職員会議はおろか朝会にも出られなかったり、校長会などがあると事務職員・司書・実習教員の女性だけがお茶くみをさせられたり、古い本を除籍したくても「本は壊れない限り捨ててはいけない」と言われたり…。

そんな中で、支えてくれたのは職場の先生たちでした。「司書が朝会や職員会議に出られないのはおかしい」「司書の仕事を優先させてほしい」「古い本の更新が必要」と、図書館係や組合員の先生たちが一緒に声を上げてくれたのです。やがて司書と実習教員は職員会議の構成員として認められ、お茶くみ自体もなくなりました。

学校司書の新任研修も、今では4月上旬に行われていますが、以前は7月になるまでは実施されず、図書館実務について聞く相手もなくわからないことだらけでした。

そんな経験をした司書たちが要望してできたのが現在の新任司書研修です。研修の最初に取り上げる「新入生への図書館オリエンテーション」も、現場の要望で生まれ定着した行事ではないでしょうか。

埼玉の高校図書館は、この40年ほどの間に、着実に進化・充実してきたといえます。司書の採用試験があり、すべての高校に専任司書が配置されている県は、全国でもごく少数のようです。多くの教職員や司書が、「もっと図書館をよくしたい、生徒に本を読んでもらいたい、司書が働きやすい環境にしたい」と声を上げ、頑張ってきた結果だと思っています。

新人の皆さんも、毎日迷ったり悩んだりされていると思います。そんな時は、校内の先生たちや他校の司書という「仲間」に頼ってください。みんな、頼ってもらえるのはうれしいんです。先生との何気ない雑談からも、生徒への接し方を教わったり、「こんな本があるといいなあ」なんて情報をもたらえたりします。司書も、キャリアや年齢関係なく対等に話ができるのがいいところ。遠慮せず色々な人に相談してみてください。

生徒からも、アニメやコミックの情報、図書館の印象など、結構鋭い見方にドキツとすることもあり、教わることのほうが多いくらい（生徒と年齢の近い皆さんは、そんなことはないかな?）。教室で出せない生徒の本音が聞けるのも図書館だからこそ。

学校には多くの新しい学習方法や考えが入ってきます。でも、本を読む楽しさを知った人は、一生使える財産を手に入れる、そのことはこれからも変わらないと思います。読書の力を生徒や教職員に伝える送り手として、一緒に悩んでいきましょう。

新たに教職員になられた

皆さんへ

東京電機大学 前島 康男

新たに教職員になられた皆さんに、私がお伝えしたいことは以下の三点です。

まず、第一点目は、次のサムエル・ウルマンの「青春」という詩にあるように、常に「感動する心」「子どものような好奇心」「挑戦する喜び」など「若き精神」を失わないでいてほしいということです。

「青春とは／感動する心／子どものような好奇心／挑戦する喜び／真の青春とは／若き精神の／なかにこそある」

そのためには、十分休養もとるように努めるとともに、多様な人々と接するようにしながら、心の栄養である、映画、演劇、音楽、絵本等に出来るだけふれることなどにも努めてほしいと思います。

心身ともに健康でフレッシュでいることが子どもたちと接する教職員という職業の場合特に重要だと思っています。

次いで、第二に、教職員として自分なりの実践スタイルの確立を目指してほしいということです。

そのためには、学校や民間研究会、組合研究会などで先輩や同僚教職員の優れた教育実践に出来るだけ多く学ぶとともに、職場教研や組合教研、そして民間教育団体の研究会などに出来るだけたくさん出席し、自らの教育実践をまとめたものを検討していただくことが欠かせない作業でしょう。

そして、それらの教育実践をまとめたものをいずれの時期に、一冊の実践記録にまとめることをお勧めします。

次いで第三に、述べたいことは、教職員の命に関わることです。現在日本の教職員の労働環境は、世界一長時間過密労働です。このような中で、教師の過労死・過労自死や教師の鬱等も問題になっています。例え

ば、学力テスト日本一を争う福井県では、10年間に9人の教師が過労死し、その多くが過労自死しています。そして、昨年福井県議会では、学力テスト日本一をあらそう競争が教師と生徒を苦しめているので、そのようなばかげた競争をやめようという趣旨の意見書をあげています。

このような労働環境や教育環境を変えるためには、組合員のなかまを増やししながら、他の働く仲間や多くの国民と協力し、教職員の増員などの労働環境の改善等に努めることが大切です。

しかし、新しい教職員の皆さんには次の私の言葉を胸に刻んでほしいと思います。それは、苦しく追いつめられたときは「逃げよう」ということです。いじめで自死した子どもの遺族は、必ず、なぜいじめで自死するくらいなら登校拒否をしてくれなかったのだと言います。苦しく追いつめられたら、まずは休んでゆっくり休養し力を蓄え、その後、前へ進んで下さい。

若い教職員の方々のご健康とご健闘を祈ります。

